

# 戦姫絶唱シンフォギア～青薔薇の剣士と歌の戦士達～

立花オルガ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

アンダーワールドで命を散らした、キリトの相棒ユージオ。その命は再び戦姫達の世界で咲かせる！

\*この作品はT o g aさんとの共同制作作品です

\*熊0803さんにユージオの絵を描いてもらいました。

ユージオのSONG隊員服←

## 目次

プロローグ	
青薔薇の剣士、再び蘇る	1
戦姫絶唱シンフォギアG	3
邂逅	3
真実	7
ガングニール・ガール	9
英雄	9
片翼	13
Power and lies in the chest	13
偽善者の烙印	15
Those who desire the end, those who face the end	15
疑念	20
終わりの名を持つ者	24
コラボ特別章	30
異世界の仮面の戦士	30

## プロローグ

### 青薔薇の剣士、再び蘇る

ルーリッド村の少年ユージオは唯一無二の親友キリトと整合騎士アリス・シンセシス・サーティとともに人界の最高司祭アドミニストレータと戦い、命を落とし、アリス・ツールベルクとともにアンダーワールドから消滅した。

♪♪♪♪♪

「ん…ここは？ アンダーワールドじゃない」

「きゃあああ！」

「人の悲鳴！何が起こってるんだ？」

僕は悲鳴のする方へ向かうと、

人型のような化け物が襲っていて、襲われた人は次々に炭になっていたのだ。

『ノイズが出現しました。地域住民の方は指定のシエルターに退避して下さい。繰り返します。ノイズが出現しました。地域住民の方は指定のシエルターに退避して下さい』

と聞こえてきた。その直後、そのノイズ？と言われていた化け物が襲ってきた。やるしかないのか！そう思い、僕は腰につけていた愛剣、青薔薇の剣を抜き、ノイズに対して、アインクラッド流ホリゾンタルの構えを取り、ノイズ達を蹴散らした。

#### 同時刻

特異災害機動2課基地の司令室に警報が鳴り響く。

その事をオペレーターの一人、友里あおいが報告を入れる。

「市街北西にてノイズの反応を確認、現在市民の避難のために警報発令中！」

司令の風鳴 弦十郎はその報告を聞き、指示を飛ばす。

「よし！シンフォギア装者に出動命令！」

各オペレーターは装者宛に回線を繋ぎ連絡を始めると状況を整理していたオペレーターの一人、藤堯 朔也が叫ぶ。

「司令、最速で向かえるのは立花 響、雪音クリスの両名です!」

「わかった。二人にはすぐに翼が合流すると・・・」

「つて、ええ? なんだこれ!」

何かを見た藤堯が驚きの声をあげる。

「どうした?」

同時に弦十郎の見る画面に藤堯からデータが送られる。

「これは・・・一体・・・」

「くっ…何がなんでも、数が多すぎる!」

ユーゾは倒しても倒してもどんどん湧いてくるノイズに苦戦していた。そこで一気に片付けたためにあの技を繰り出した。

「エンハンス!アーマメント!」

そう言つて、剣を地面に突き刺すと剣の周りに氷が広がり、周りになっていたノイズ達を氷漬けにした

「ねえねえ、クリスちゃんなんか寒くない?」

「そうだな、でも、おかしいな。まだ夏だぞ?」

二課の装者、立花響と雪音クリスは現場に向かいながら、そんな話をしていた。確かに今の季節は夏である。でも、その悩みは現場に着くとすぐ分かった。

「二な、なんだこりゃ!」

そこに着くと、ノイズ達が氷漬けになっており、その中心に青い薔薇がかたどられた剣を地面に突き刺して、そのまま動かない男の子がいた。

t o b e c o n t i n u e . . .

## 戦姫絶唱シンフォギアG 　　くプロローグく 邂逅

二人はその光景にしばらく呆気にとられていたが、

「おい！バカ！ノイズ達はまだうじゃうじゃ湧いてやがる、倒せていないぞ！」

クリスの言葉で我に返り、二人はシンフォギアを纏うための聖詠を唱えた。

「Balwisyall nes cell gungnirtro  
n...」

「Killter Ichai val tron...」

二人はシンフォギアを纏い、それぞれの歌を歌いながら、戦い始めた。

「歌...?」

僕はノイズ達を氷漬けにした後、しばらく俯いたままだったが、歌が聞こえてきて、周りを見渡すと女の子二人が歌を歌いながら戦っていた。一人は武器を使わず、拳一つで戦っていて、もう一人は弓?と似ているけど全く違う武器でたくさんノイズを倒していた。

(僕もあの子達の手助けをしよう!)

僕はそう思い、剣を地面から抜き、残ったノイズに向かって、シャーブネイルなどのアインクラッド流の剣技をつかい、ノイズたちを倒した。

辺りのノイズがいなくなると

「君、大丈夫?」

と栗色の髪の毛の子が話しかけてきた。

「うん、大丈夫。僕はユージオ。ところで、君たちは一体誰?」

「私は立花響15歳です!誕生日は9月の13日で、血液型はO型。身長はこの間の測定では157cm!体重は乙女の秘密なので言えません!趣味は人助けで、好きなものはご飯&amp;amp;ご飯!」

「つたく、このバカはいつも通りだな、あたしの名前は雪音クリスだ。ところで、あの氷は一体なんなんだ？」

と銀色の髪の毛の子が話しかけてきた。

「ええと、あれは…『そういう話は二課でしましょう』うわあ！誰！つて、えええ！」

僕の周りに黒い服の集団が現れ、僕の腕を拘束し、黒い物体に寄せられた。

少年移動中

「……です」

今まで僕が乗せられた物体は移動するものだったのかな？

とにかくそれで目的地に着き、先程僕を拘束した人達に連れられて、水に浮かぶ巨大な建物の中に入ると、

パンパンパン！

「ようこそ人類守護の砦、特異災害対策機動部二課へ！歓迎するぞ、ユージオ君！」

と前には僕の名前が書いてある紙がかかっており、真ん中にはそれこそゴルゴロツソ先輩くらいの体格をした赤い髪の毛の男の人が立っていて、パーティの支度が机には並べられていた。

「あの…これは…」

「何って…君を迎え入れるためじゃないか、俺はこの特異災害対策機動部二課の司令官、風鳴弦十郎だ。」

「はあ……」

僕が何がなんだかわからず困惑していると、さっきと同じ黒服の女の子が飲み物を差し出しながらこう言った。

「いきなり連れてこられて困惑しますよね？まずは温かいものどうぞ」

「は、はあ……温かいものどうも」

温かいもの——どうやらホットミルクのようだ。

それを一口飲むとその女の人はこう自己紹介を始めた。

「私は友里あおいと言います。この特異災害対策機動部二課のオペ

レーターを担当しています。」

「同じくオペレーターの藤堯朔也だ。この二課は認定特異災害ノイズに対応するため日本政府が設けていた組織です。」

「ノイズ…？さつき群がっていた化物のことですか？あれは何なんですか？」

「ああ、それを話すと長くなるのだが、ノイズとは…。」

それから僕はノイズについて、さらにそれに対抗するためのシンフォギアについても教えてもらった。

「ノイズ、シンフォギアシステム…。」

「端的に言おう。ユージオ君、君にはここの協力者になってもらいたい。」

「僕がですか？ノイズに対抗出来るのは彼女らが纏うシンフォギアだけなのでは？」

「藤堯、先程のデータをモニターに出してくれ。」

「了解しました。」

そう言って、ステイシアの窓のようなものを前に出した。

「これが先程の現場の聖遺物の反応だ。本来なら、あそこでの聖遺物の反応は響君のガングニールとクリス君のイチイバルしかないはずだ。だが、ここにもう一つ反応がある。おそらく、君の持っているその武器だ。後、モニター解析の結果、君にノイズは確実に触れているが君は炭化していない。」

「え…？」

「君の体や武器には何か秘密がある事は确实だ。だから君に手伝ってもらいたい。」

「…分かりました。」

「ありがとう、ユージオ君。では、君の体を調べさせてもらう。」

「…え？ええええ！」

僕はまたどこかへ連れて行かれた。

♪♪♪

「はい、お疲れ様、じゃあ、今日はここのベッド使ってもらって構わな



いから。」

「ありがとうございます、友里さん」

そう言つて、僕は医療室のベッドに案内され、眠りについた。キリト達の事を考えながら…

(キリト、アリス…)

t o b e c o n t i n u e d …

## 真実

僕がこの世界に来て、一夜が明けた。

「おお起きたか、ユージオ君」

そこには昨日いたメンバーが揃っていた。

「おーい、ユージオ君こっち、こっちー！」

昨日、あの戦ったところでも真っ先に話しかけてくれたヒビキが呼んでくれたので、みんながいる机に向かい、椅子に腰掛けた。

「あれ？そういえばもう一人いるのではないですか？」

「ああ、翼なら今仕事で合同のイベントが入っていて、忙しいんだ。」  
（仕事か…僕もキリトが来るまではギガスシダーを切るので忙しかったな…）

「さて、今日のミーティング内容だが、まずはユージオ君の検査結果だ。ユージオ君、君の体からはその青薔薇の剣…だったかな？その剣と同じ反応が確認された。」

「えっ！それって私と同じことになっているということですか☒」

と響は自分と同じ事が起こっていると思い、声を上げた。

「いや、響君、君の融合とは少し違っていてな、体そのものが融合している、ユージオ君がノイズに触れても炭化しない理由もこのことが原因だろう。これは多分彼がこの世界に来る前に経験した事が関係していると思うのだが、思い当たる節はあるか？」

…ある、あの時だ…僕がカーディナルに頼んで、青薔薇の剣と同化して、ソードゴーレムと同等の剣にしてもらった。

多分その事が原因だと思う。

「…あります。でも、そのことを話すには話が長くなります、それでもいいですか？」

「…いいだろう」

僕はみんなにあの世界、キリトと共に過ごしたあの日々や戦いについて話した。



「…なるほどな、カーディナルに整合騎士、シンセサイズ、アドミニストレータか…」

と話していると、この部屋に白髪の男性が入ってきた。

「あのー、話を聞いていたのですが、君は別の世界から来たんですか？」

「ッ！誰だ！」

「ああ、この人は米国連邦聖遺物研究機関より出向してきたジョン・ウエイン・ウエルキングゲトリクス博士だ。実はこの人がもう一つのミーティングの内容に関係するのだが、博士を米国の岩国基地まで、ソロモンの杖と共に送ってほしいんだ。」

「ソロモンの杖って、昨日僕が武装完全解放術を使って氷漬けにしたあの化け物を操る聖遺物ですか？」

「そうだ、あの杖は日本とアメリカの合同研究のために役立てるつもりだ。」

「そうだったのか…」

「そうか…ソロモンの杖はクリスが起動させたから、複雑な気持ちなんだな…」

「やあやあ皆さん、僕の事はウエル博士とでも呼んでいただければいいですよ。」

(あの人、なんか怪しいな)

僕はそう思いながらも護衛任務の為の準備を始めた。

♪♪♪♪♪

「別世界から来た聖遺物との融合症例ですか…これは面白いことになりそうですね…フヒッ！」

誰もいない部屋でウエル博士は独り言を言いながら、気持ちの悪い笑い方をした

t o b e c o n t i n u e d …

## ガングニール・ガール 英雄

岩国基地へ向かう電車の中

「ユージオ君！そっちにノイズが！」

「わかった！」

輸送途中、ノイズが強襲してきたので、博士達は前の方の車両に逃げてもらい、後ろの方で応戦している所だ。

(場所が狭い上、たくさんいる！こういう時には…)

僕は剣を腰の横に構えた。

「アインクラッド流…！バーチカル・スクエア！」

四方にいるノイズ達を四角形を描きながら斬ったが、空中にいるノイズが残ってしまった。

「しまっ…！」

とその時光矢が飛んできて、空のノイズが次々に炭になっていった。

「空の敵は任せな！お前とバカは地上にいるノイズをやってくれ！」

「わかった！」

「アインクラッド流！シャープネイル！」

剣を所定の位置に構え、横、斜め、縦と爪の様な挙動の斬撃を3回叩き込み、迫りくるノイズ達を次々に斬り倒していった。

「すごい…！翼さんにも負けないくらい、剣のスピードが速い！」

「それにしても、全く減らないね…一気に倒せれば、いいんだけど」

「そうだ！あの方法で！」

「あの方法…？」

どうやら、ヒビキが一気に殲滅する方法を思いついたらしい。

「うん！ユージオ君はノイズの気をひいて、クリスちゃんはトンネルに入ると同時に車両の連結部を撃ち抜いて！」

「車両をぶつけるだけじゃノイズは通り抜けてくるぞ！」

「大丈夫！私を信じて！」

「…わかった!」

ヒビキに言われた通り、ノイズの気を引き、所定の位置まで来た。

「っ!クリスちゃん、お願い!」

「オラっ!」

車両は切り離れたが、ノイズはクリスが思った通り、すり抜けた。

「ここからどうするの、ヒビキ?」

「まあ、見てて!はあああああっ!」

そう言うのと、ヒビキは車両の中に入ったノイズに向かって思いつきり殴り、その炭素化した勢いで車両は爆発し、多くのノイズを減らすことに成功した。

「やった!!」

(あえて退路を断つことで重い一撃を広範囲に広げるなんて…こういう無茶な感じ、キリトみたいだなあ)

(こいつ…いつの間になんかに戦えるようになったんだ?)

「この調子で残りのノイズも片付けよう!」

「あ…ああ!」

「お前にだけいい所取らせる訳にはいかないからな!」

そう言うのと三人で残りのノイズを片付け、レッシヤは目的地に着いた。それにしても、このレッシヤってすごいな…どうやったらこんな翼竜よりも速いスピードが出るんだろう?



「ルナアタック事変の英雄の力、見せてもらいましたよ」

「いやー、いつもあまり褒められないからいざ褒めら…!このバカ!調子に乗るな!」 いったいよー!クリスちゃん!」

ウエル博士が礼を言い、褒められて、調子に乗った響をクリスが制止するため引っ叩く。

「世界がこんな状況だから、今世界は英雄を求めている…ここまででありがとうございました。ではさようならルナアタック事変の英雄、そして英雄の相棒さん。皆さんが守ってくれたソロモンの杖は必ず役に立てますよ」

そう言うのと博士は基地の方へ向かい、基地へ入っていった。

すると

「っ！気をつけて！ヒビキ！クリス！」

「えっ？うわああ！」

ユージオが嫌な気配を察知し、装者二人に注意した瞬間、基地が爆発し、ノイズが大量発生した。

「ここはあたしに任せろ！二人は博士の安否の確認に迎え！」

「了解！」

♪♪♪

その後、博士を搜索したが、見つからなかった。でも、なんだろう…この違和感。何かとんでもないことが起こりそうなの…

そんな違和感を抱えたまま次の日を迎え、僕がまだ会っていないまだ僕が面識のない装者が違う国の人と合同でライブ？というルーリッドで行われた祭りのようなものを開くというので、僕はその入り口に怪しい人がいないか見張る警備に当たった。服装はオガワさんが用意してくれた黒い服だ。念の為に剣は持っている

ライブが始まり、中ではすごく綺麗な歌声と歓声が聞こえてきた。

一曲歌い終わった時だった、歓声が悲鳴に変わった。

慌てて僕は中の様子を見ると、ノイズが大量発生していたのだが、それ以上に衝撃的な事が起こっていた。ツバサと組んでいたマリアがヒビキ達と同じシンフォギアを纏っていたのだ。それにノイズの動きが変だ…まさか、ソロモンの杖か☒

その時、耳につけたものから声が聞こえてきた、オガワさんだ

「ユージオさん！非常事態発生です！ノイズが現れました！幸い今は犠牲者は確認できないので、会場の周りに人がいないか確認して来てください！」

「了解しました！」

僕はこの会場の周りに人がいないか確認していると、

「マリアが行動を開始したよ、あたし達も動こう」

「待つデス、調！ここは慎重に動くデス！」

とアリスに似た声が聞こえて来たので向かうと二人組の女の子がいた。

「君達、ここで何をしてるの？」

「あ！だだ大丈夫デス！ちよつとトイレに行こうと思つたら、道に迷っただけデス！」

「切ちゃん、私はここで出しても構わないんだよ？」

「調！何とんでもない事口走っているんデスか！」

「あはは…でも、今会場でノイズが発生したから、外まで送ろうか？」

「全然、問題ないデス！」

「そう…じゃあ気をつけて避難してね！」

僕はそういうと、他の人たちがいないか確認に向かい、無事を確認し終わると、

「ユージオさん！響さんとクリスさんは今こちらに向かっているので至急翼さんの援護に向かってください！」

と聞こえたので、ステージの裏口へ向かった。

到着すると、何故か二人の装者が戦っていて、青い女性の方が優勢だった。

そんな時、僕は上の方から何かが近付いてくるのを感じ、ソニック・リープを繰り出した。

「デッー」「うっ！」

予測通り、増援が二人来たようだ。だが、

「あれ？君たちはさっきの…？」

「デデデースー！」「驚き…」

その二人はさっき迷子になっていた子達だった…

t o b e c o n t i n u e d …

## 片翼

時は遡り、ライブ前…

『この盛り上がりは皆さんに届いているでしょうか？世界の主要都市に生中継されているトップアーティスト二人による夢の祭典！今も世界の歌姫マリアによるスペシャルステージにオーディエンスの盛り上がりも最高潮です!!』

テレビから流れるアナウンサーの声を聞きながら、二課所属のシンフォギア装者、最後の一人——風鳴翼はライブ会場の舞台裏で眼を閉じ、次の自分の出番までイメージトレーニングをしていた。

その翼の近くでマネージャーである緒川慎次は電話をしている。電話相手は風鳴司令だ。

「状況はわかりました。それでは翼さんを」

「無用だ。ノイズの襲撃と聞けば、今日のステージを放り出しかねん。ユーゾ君の協力も得られることになったんだ。翼には今日のステージを全うしてもらいたい」

「そうですね…了解しました。ではそちらにお任せします、翼さんにはうまくごまかしておきます。」

電話を切った緒川に翼はこう声を掛ける。

「司令からは一体何を？」

「今日のステージを全うしてほしいと」

そう言いながらメガネを外した緒川に対し、翼は指を差しながら

「はあ……。メガネを外したということはマネージャーモードの緒川さんではないということですか。自分の癖くらい覚えておかないと……」

そう小言を言い始めたが、「お時間そろそろです」というスタッフの声に遮られてしまった。

「はい！今行きますー！」

そうスタッフに答えた翼に緒川はこう言った。

「傷ついた人の心を癒すのも、風鳴翼の大切な務めです。それに僕は嘘なんて言ってませんよ？司令は本当に「今日のステージを全うして



ほしい」と言ってたのですから」

「……不承不承ながら了承しましょう。詳しい事は後で聞かせてもらいます」

そう言った翼はコラボする相手、マリア・カデンツァヴナ・イヴと同時に会場へ向かった。

♪♪♪

そして、マリアと翼のこのイベント限定のコラボ楽曲「不死鳥のフランメ」を歌い終わった後、マリアはこう言った。

「今日のライブに参加出来た事を感謝している。そして、この大舞台に日本のトップアーティスト風鳴翼とユニットを組み歌えた事を」

「私も素晴らしいアーティストと巡り会えた事を光栄に思う」

マリアと翼は固い握手を交わす。

「私達が世界に伝えていかなきゃね。歌には力があるってことを」

「それは世界を変えていける力だ」

しかし、その後、マリアが――

「そして、もう一つ」

そう呟いた刹那

ライブ会場に無数のノイズの群れが出現したのだった。

t o b e c o n t i n u e d …

P o w e r a n d l i e s i n t h e c  
h e s t

## 偽善者の烙印

時は戻り、ライブ会場内

「そうか、君達はさつき迷っていたんじゃないやなくて、合流する為にあそこ  
にいたんだね」

僕は先程会場の裏で出会った二人と対峙していた。

「ツーだから、何だつて言うんデス！」

切・呪りeツTお

金髪の子は大きな鎌を切り上げ、刃先を飛ばしてきた。

僕は飛んでくる刃を何とか回避すると、

「切ちゃんに気を取られすぎ……」

γ式・卍火車

黒髪の女の子が回転する刃で突撃してきた。

僕はとつさに防御の構えを取り、相手の突撃の勢いを相殺し、それ  
をパリイで弾いた。

「くっ……」

その時、

「あなた、そこをどきなさい！」

「えっ！あつ、はい！」

ツバサがそう叫び、僕は慌ててその場所から退くと

「土砂降り、十億連発だ！」

上から雨のような光弾が敵の子たちに向かって、降ってきた。

それを降らせたのは落ちてきたヒビキとクリスだった。

金髪の子と黒髪の子は回避行動をとり、マリアにはマントで防御を  
されてしまった。

そこへ

「うおおおりやああー！」

ヒビキが光弾を防御するのに必死なマリアに強力な一撃を叩き込

もうとしたが、すんでのところまで避けられ、地面に大きな穴を作っただけだった。

二人が地面に降り立った時、

「やめようよこんな戦い！今日出会った私たちが争う理由なんてないよ！」

「…っ、そんな綺麗事で…」

「…え…………」

「綺麗事でものを解決しようとする人の言う事なんか信じられないです！」

「そんな…話せばわかるよ！だから…………」

「偽善者…」

黒髪の子が言葉が続ける。

「この世には、貴方のような偽善者が多すぎる…!!」

そう言い放つと、また攻撃を開始してきて、今度は刃物を発射してきた。

だが、ヒビキはあの子に言われた事がショックで、動けていなかった。

すかさず、ツバサが間合いに入った事で事なきをえて、クリスが三人めがけて光弾を放った。

しかし、かわされてしまいツバサは槍の人と、ヒビキは先程言い争っていた子と、クリスは後方支援、そして、僕は大幅りの刃物を持った子と対峙する形になっていた。

「デース！」

「あれだけの大きさの刃物は見たことない…けど…！」

(エルドリエさんが使っていた鞭に比べれば…！)

長物を使う際は隙が大きいという弱点を思い出し、アインクラッド流奥義「スラント」の構えをし、下からの切り上げをして、一瞬怯んだ隙に肩の上に剣を持ち直し、上から剣を振り下ろし、相手の子を大きく後退させることに成功した。

「うう…シンフォギア無しでもここまでの威力デースとは…」

「もうやめて！これ以上戦う必要は…」

「それでも…負けられないのデース！」  
「うっ…！」

僕は相手の子に語りかけようとしたが、それを遮るように叫びながらこちらに走ってきて、刃を振りかざしてきた。

僕は刃と交わすような感じで受け止めたが、互いに一步もひかない状態だった。

その時だった。

「※\$♪☆○#×！」

中央からソードゴーレム程の大きさのノイズが出現した。

「何、あのでっかいノイズは！」

「増殖タイプ…」

「こんなのが投入されるなんて聞いてないデスよ！」

僕もそうだが、みんなも予想外ことだったのか驚いている。

「ママ？…分かったわ。切歌、調撤退するわよ！」

マリアが何やら通信機越しに誰かと喋って、仲間の子達…キリカとシラベに撤退命令を出すと、武器からノイズに向けて光弾を放った。

#### HORIZON†SPEAR

大型ノイズは分散し、破片が会場内に飛び散った。

その際にマリアたちは撤退していった。

「ここで撤退するだど！」

「こんなところで尻尾を巻くのか！」

ツバサとクリスは追おうとするが、さっきの破片が一体のノイズとなり、会場のあたり一帯に広がっていった。

「せややあー！」

ツバサがノイズを切り裂くも、どんどん増えていく。

（何か分裂をさせずに一撃で倒す方法を…そうだ！）

「みんな会場から離れてステージの上に移動して！あのコンビネーションの準備を！」

「…っ！まさか、あれは未完成の技なんだぞ！」

「だが、その方法が一番理にかなっている」

「翼さん！クリスちゃん！ユージオ君を信じよう！」

そう言つて、みんなどいてくれたので僕はすかさずノイズ達を会場の中央へおびき寄せた、そして…

「武装完全支配術！エンハンス・アーマメント咲け…！青薔薇！」

剣を地面に突き刺し、武装完全支配術を唱えその場にいた全てのノイズを凍らせた。

「後は任せたよ、みんな！」

僕はその場から離脱し、あの技が当たらないように三人の近くに戻ってきた。

「よし、いくよー！」

ヒビキはツバサとクリスと手を繋ぎ、唄い始めた。

「Gatrandis babel ziggurat eden  
a l

Emustolronzen fine el baral  
zizzl

Gatrandis babel ziggurat ed  
enal

Emustolronzen fine el zizz  
l」

「セツト！ハーモニクス…これが私達の…！絶唱だあああああ！！！」

すると、ヒビキの腕に巨大な腕が鎧によつて形成され、それを凍つたノイズに対してぶつけた。

ノイズは分裂することなく撃退され、放つた後に虹のような

竜巻が天に上った。それはとても綺麗だった。

戦いが終わり、全員が鎧から元々の姿に戻った。すると、ヒビキがその場に座り込んでしまった。

「無事か!?立花！」

「大丈夫？ヒビキ？」

「へいき…へっちゃらです…」

「へっちゃらなもんか！　まさか、絶唱の負荷を中和しきれなくて

…？」

僕たちは駆け寄つたが、座り込んでしまった理由は違った。

「私のしてることって偽善なのかな…？胸が痛くなることだって知ってるのに…」

あの時の女の子…シラベの言葉に傷ついていたのだ。

「ヒビキ…僕は君と会ったばかりで何も分からない…でも、これは一つ言える。君が正しいと思ってるやっっているならそれは偽善じゃないよ」

「そう、あの時禁忌目録を破ってでも、自分の心に従い、ティーゼ達を助けたのと同じように…」

「…うん、そうだね。ありがとう、ユージオ君少しだけでも元気が出たよ！」

「そう、よかった…」

そんな様子をツバサはあまり僕のことをよく思っていない視線で見ていることを知らない…

t o b e c o n t i n u e d

Those who desire them  
d, those who face them  
d

疑念

あのライブから数日、あれ以来まったくF・I・Sは行動を起こさず全てが不可解なままだった。

そんなある日

「ノイズが出現！方角は北東！」

「なんだとお！周辺でソロモンの杖の反応はあるのか？」

「いえ、今のところ周辺に聖遺物の反応はありません。おそらく、自然発生したものと思われれます…」

「ふむ…そうか…」

「現在、翼さんとユージオ君が現場に着きそうです！響さんとクリスさんは少し遅れて到着されるようです！」

♪♪♪

「せやああー！」

僕とツバサは発生したノイズ達を倒していた。今回のノイズはあの杖で呼び出され、操られたものではないらしい。

「これで終わりにしてくれよう！」

千ノ落涙

ツバサが放った技によって無数の剣が上から雨のように降り、周りにいたノイズを跡形もなく消滅させた。僕はすんでのところで避けたけれど。

…少し前から思っていたのだが、ツバサは何か僕がいる事に苛立ちを抱えているように見える。

この際だから聞いておこう…。

「ねえ、ツバサ。君は僕のことを避けてないかな？」

「……………」

ツバサは何も答えない。

それどころか、僕をジツと睨みつけてくるくらいだ。

「僕が何かしたかな……?」

「貴様は……」

「ユージオ君！翼さん！」

ツバサは何かを言おうとしたが、それはやってきたヒビキの声に掻き消される。

「翼さんどうしたんですか！」

「どうしたもこうしたもない！私は貴様を信じられない！」

「翼さんも聞いてたんですよね？ユージオ君は私たちとは別の世界から来たこと！」

「だが、それさえも私達を欺く嘘かもしれないのだぞ！」

「お前も聞いただろ！こいつの話した事は少しファンタジーじみてるが嘘をついてるとは思えね」問答無用っ！「おいっお前！」翼さん！

突然切りかかってきたツバサに対して、僕はとっさに剣を構え直し、ツバサの剣を受け止めた。

「くっ……！」

「私はあなたを認められない！この時期に仲間に入ってきた時点で怪しいのがシンフォギアを使わないのに一緒に戦えるというものもおかしな話だ。それにまだ、貴様からは本当に私たちと戦いたいという覚悟が感じられない！認めてほしくば、私にその覚悟を示せ！」

ツバサはするどい目つきで僕を睨んだまま、天高く飛び、何をするのかと思っていたら持っていた剣を巨大化させて巨大な一閃をふるい、そのふるいに呼応するように剣から巨大な光な刃が放たれた。

蒼ノ一閃

(避けられない！なら……！)

僕は剣を体の前で風車のように回転させ、アインクラッド流防御技の『スピニングシールド』を使い、衝撃波をなんとか防ぎきり、空中にいるツバサを視認した。

「そちらが本気でかかってくるのなら僕も全力で戦います！」

(この距離なら僕でも飛べる！)



そう思い、上へ飛び上がり、剣を振り上げツバサに向けて振り下ろした。

「なっ……！」

ツバサは驚いたのも束の間完全に油断していたのもろに直撃し、地面に叩きつけられた。

その直後すぐに着地行動をとった後、水平斬りと垂直斬りを2回交互に行い、牽制の突進を入れ間髪いれずにその後、縦、横、斜めと斬り込んだ。

ノヴァ・アセンション

♪♪

(くっ、素早い！一つ一つの剣の動きが洗練されていて、とても重みを感じる……このような剣技、付け焼き刃でどうにか習得できるものではない！)

翼はそんなことを思いながらも、なんとか防いでいたが、最後の一次突きで不意をつかれ、アームドギアを手放してしまった。

(……やられるっ！)

そう思ったがユージオの剣は翼の体の手前で止まっていた。

「どうしますか？まだ戦いますか？」

そう聞かれ、私は負けを悟つたのと同時にユージオの覚悟の眼差しを見て、敵意は無い事を感じた。

「ふっ……私の負けだな。先程までの非礼を許してくれ、これからも仲間としてよろしく頼む」

「はい、こちらこそ宜しくお願いします。」

♪♪

「終わったようだな……」

翼とユージオの戦いの一部始終を司令室のモニターで観察していた弦十郎が呟いた。

「ええ……一時はまた響ちゃんの時みたいに司令が飛び出していくのかとヒヤヒヤしましたよ……」

オペレーターの藤堯がそう答えると、弦十郎は答えた。

「ん……？今回は出ていくつもりはなかったが？ユージオ君の剣は前の

世界から実力は確かものと聞いている。それに……」

「それに……？」

「翼はあの時とは確実に変わったからな」

♪♪♪

ツバサには何か誤解があったようだけど、とりあえずは認めてくれた。

本部に戻ってきた後、次の任務を言い渡された。なんでも、オガワさんがF・I・Sの本拠地を掴んだらしい、それで明日本拠地としている病院に装者たちと突入するらしい。

その報告を受けた後、全員がそれぞれの家に帰った後、オガワさんに声をかけられた。

「ユージオ君、ちよつといいかな？」

「あ、はい……何でしょう？」

「翼さんはああやって、少し固いところありますがよろしくお願いします」

「はい、もちろんです！」

僕はそのオガワさんの言葉を聞いた後、現在借りている本部の就寝スペースに向かった。

t o b e c o n t i n u e d

## 終わりの名を持つ者

あの騒動の翌日、オガワさんが敵の居所に関する情報を得たことにより、そこへ夜、突入することになった。

夜になった理由は、ヒビキ達は普段は普段は学生生活を送っているからだ  
と聞いた。この世界における修剣士学園のようなものかな…

僕は学園に残してきたティーゼとの最後の会話を思い出していた。

~~~~~

『ユージオ先輩！ユージオ先輩…ごめんなさい。私の…私のせいで！』『違うよ…違うんだ。ティーゼは悪くない。君は友達のために正しい事をしたんだ。こうなったのは全部僕のせいだ…ティーゼが謝ることなんて何もないんだ…』

『今度は…私がユージオ先輩を助けます！私頑張ってきたと整合騎士  
になって先輩を助けに行きますから！』

~~~~~

別れもすっかり言えず、ここへ来てしまったなあ。

そういえば、アリスと再会したのもこの時、だったなあ…

~~~~~

『アリス…君なのか…？』

『言動には気をつけなさい。私にはお前達の天命を7割まで奪う権利  
があります。次に許可なく触れようとしたらその手を切り落としま  
す』

『なあ…あの騎士はお前の探してたアリスなのか？』

~~~~~

…思えば、最悪の再会だったな…その後、記憶を消されていたこと  
が分かったからアリスは悪くないことが分かったんだけど…

キリトとアリス…無事かな…

♪♪♪

その夜

オガワさんが掴んだ情報を元に敵のいる場所にやってきた。見た  
ところ何かの施設だった跡みたいだ。

周囲の警戒を怠らずに進んでいくと、

「なんか、空気が重くなってきましたね…」

「ユージオ、気をつけろ」

「了解、ツバサ」

「…おっと、ずいぶん早い出迎えだぞ」

ノイズが数体近づいてくるのが見えた。

ヒビキ、ツバサ、クリスはそれぞれシンフォギアを身に纏い、僕は剣を抜いた。

先陣をきつたのはクリスだ。持っていた弓を変形させ、そこから放たれる弾でノイズ達を一掃した。

BILLION MAIDEN

しかし、次々に現れてくる。という事は…

「次々に出てくる…！これは…！」

「ビンゴだな！こいつらは制御されてやがる！」

襲いかかるノイズ達を次々に倒していくが、みんなの様子がおかしい。

「みんな、どうしたんだ!?」

「分からない…でも、いつもよりかパワーが落ちてる気がするっ！」

みんなもう息をあげてる…一体どうしたんだ!??

「フジタカさん！そちらから何か分かりますか!?」

「こちらで全員のバイタルチェックを行っていますが…三人の適合係数が急激に低下しています…このままでは戦闘継続は不可能になります！」

「…っ！そんなっ！」

こうなったら、広範囲のソードスキルで一気に倒すしかない！

僕は剣を逆手に持ち替え、前方へ飛び、地面に剣を突き立てて衝撃を広げた

ライトニング・フォール

これで周りにいたノイズは全て片付いたはず…

「ユージオ君！後ろ！」

「くっ…！」

ヒビキの呼びかけなんとか対応できたが…

「今の…攻撃を与えても炭化しなかった…」

「どうして…まさか、ノイズじゃない…!?？」

「じゃああの化け物は一体何なんだよ!?？」

例えるならそう、ダークテリトリーの化け物のようだった。体は灰色で、体には赤い筋がある。大きさは元いた世界にいた普通の魔物と変わらない大きさだった。

そんな中、誰かが拍手をする音が聞こえてきた。

その音がする方を向いた途端、僕は驚いた。

なぜなら、あの爆発に巻き込まれたはずのウエル博士がいたからだ。

「やはり、完全聖遺物とでもなると喰らうのも一筋縄ではいかないですねぇ」

「お前っ！最初から杖を奪っていたのか！」

「ええ、そうですね！いざれ私は英雄となる！そんな僕にこそソロモンの杖はふさわしく思いませんか！」

「思つかよっ！…っあああ！」

クリスは弾丸を放ったが、直後苦しみ始めた。

「ウエツヘツヘツヘツ！…ここには…ウヒイ！あらかじめ適合係数を下げ霧を撒いておきましたからね…ヒイツ！大きな技はそう簡単に打てませんよ！」

ウエル博士は怯えながらも話し続けた。

僕はノイズを切り裂きながらも、ノイズが運んでいるケージに入った化物を追いかけた。

「くっ…い…逃がさないっ！」

高い所にケージがいったので近くの足場を渡りながらようやくケージにたどり着いた瞬間、何者かがケージを掴み、弾き飛ばされた。そして、その人物は突如空にあいた光の前に立った。人の正体はマリアさんだった。

ウエル博士はマリアさんに近づき、こう話した。

「時間ぴったりですねぇ…フイーネ」

「フィーネ…だとっ！」

「終わりを意味する名は、我々組織の象徴であり、彼女の二つ名でもある…」

「…っ！じゃあ、あの人が！」

「ええ！彼女こそが！再誕したフィーネなのですよ！」

フィーネ…確か、僕がここに来る前にヒビキ達が倒した人って聞いたけど…何で生きてるんだ…？

いや…今再誕とか言ってたからもしかして生まれ変わりなのか…！

「さて、私達はここまでですねっ…！」

「それを渡して貰います！」

ガキンッ！

剣を振り、博士の手からケージを離させようとしたが MARIA さんが槍で受け止めた。

「悪いけどこれを渡すわけにはいかないわ！」

「くっ…！」

攻撃を受け止めるのに必死になり目を離れた次の瞬間、博士とゲージが消えた。

僕は剣を振るい、MARIA さんは槍を振るって互いに一歩もひかない状況になっていたが、突然 MARIA が顔を歪め後ろに引いた。

「くっ！時限式じゃ、ここまでなの！」

その瞬間、風が吹き荒れ、MARIA さんは飛び上がり見えないうちに捕まった。

上を見てもみるといつの間にか大きな飛行物体（後で聞いたけど、ヘリというらしい）が現れていた。そこから垂らされたロープをいつの間にかヒビキ達と戦っていたあの時の女の子二人と MARIA さんが掴み、回収されていく。

（…ここで逃せば…！）

僕は集中力を高め、ヴォーパルストライクの構えを取りキリトがチュデルキンを倒したように剣先のエネルギーを飛ばそうとしたが…

「…あれ？いないっ!?？」

飛行物体はいつのまにか消えていた。

『反応、完全消失しました!』

通信からもそう聞こえてきた。

後ろを向いてみると、どうやらクリスも攻撃をしようとしていたらしく、クリスの叫びが虚しく響く。

「クソッ！ソロモンの杖を…！返せっ…」

♪♪♪

基地へ帰ると、暗い雰囲気で見られていた。…やっぱりフィーネさんのことで結構ショックを受けてるみたいだ…

と言いつつ僕はまだフィーネさんのことをよく知らない…

「…ゲンジウロウさん、フィーネさんってどんな人だったのですか？」

「…了子君の事か、少し場所を変えよう。少し長くなるがいいか？」

「はい、今の僕にできることはみんなのことを知る事だから…」

その後、フィーネさん…ここでは了子さんとして過ごしていたらしい…は自身の子孫に特定の歌の反応が起こった際に自分の人格が目覚める様にし、様々な時代に現れたが、どの時代でも目的はある人への思いを伝えるため月を破壊することだった。今の時代にそれを可能できるまでに計画を進めたが、前に聞いたように三ヶ月ほど前にヒビキ達三人によって阻止され、最後に月の一部を破壊し消滅した…という事を聞いた。

「…以上がフィーネもとい了子君に関することだ」

「ありがとうございます、これで少しみんなのことを理解できる気がします。」

「そうか…なら良かった」

「いえいえ、僕が忙しいのに話をしてもらった身なので…」

「あ、そうだ忘れていたが今度、あの3人の学校でイベントがあるんだ。君にはここに来てからずっと働いてもらってばかりだから…そこでちよつと羽を伸ばしてこい！」

「え…僕がいなくて大丈夫ですか？」

「大丈夫だ！安心しろ！だから、思いっきり戦いの事は忘れて楽しんでっいー！」

そういってゲンジュウロウさんは親指を立てて笑った。

「分かりました！ではありがたくお休みをもらいます！」

そう言っつて、僕は現在借りている居住スペースへ戻った。

t o b e c o n t i n u e d …



## コラボ特別章

### 異世界の仮面の戦士

#### 二課内

「ノイズが出現しました！場所は南東40メートル！さらにその近くで強いエネルギー波を観測！」

オペレーターの友里あおいがそう言うと言いつつ司令の風鳴弦十郎が指示を出す

「ううむ、響くんとクリスくんは学校の行事で出払っていて、さらに翼はアイドルの仕事で、ユージオ君、一人になるが行ってくれるか？」

「はい、もちろんです！」

最近、この世界に飛ばされ二課に配属されたユージオは快く了承し、その現場へ向かった。

#### 三人称視点

「クソ！この世界に来てからいきなりノイズかよ！挨拶がわりってか、どけ！」

謎の戦士は技を繰り出したがノイズはまだまだいる

「くっ、キリがなさすぎる！」

『エレキスチーム！』

「まだか、この世界の剣の戦士は！この神の俺の情報が間違っているっていうのか！」

そんな事を会話話しながら、戦っていると青い服を着て、薔薇の装飾が施された剣を持ちこつちに向かってきた人影が戦兎達の目に映った。

「アイクラッド流ホリゾンタル！」

そう言うのと、その剣士は剣を横に構え、水平にノイズ達を斬った。

#### ユージオ視点

僕がノイズの発生した現場に向かうと、そこには仮面を被った人が戦っていた。

僕はその人に当たらないようホリゾンタルでノイズを倒した。

一応味方みたいだけど、話をしてみた。

「あなたは、セイツ！誰なんですか？」

「俺は仮面ライダービルドGOD！まずはこのノイズ達を片付けよう！話はそれからだ！」

「はいっ！」

とりあえず僕はノイズ達に向かって技を繰り出し、ノイズ達を倒して行く。

「下がって下さい！アイクラッド流奥義！バーチカル！」

僕は円を描くように剣を振り、ノイズ達に攻撃し、残っているノイズ達を全員倒した。

「ふう〜これで全部か。さて、ノイズも全部倒れたことだし、話をしようか、青の剣士ユーゾ君」

と先ほどビルドGODと名乗った人物は腰に巻いていたベルトを取り、元の姿に戻った。

「なんで僕の名前を！…ここには何の目的でしたんですか？ビルドGODさん」

「あく、これからは俺の事は戦兎と呼んでくれ。それで目的だったな…それはな…」

~~~~~

僕は戦兎さんから僕の今いる世界と似たような世界が危機に陥っていて、その世界を助ける為に色々な世界の戦士達に会って協力を要請していると聞いた。

「…ということなんだ。君が良ければついて来てくれないか？」

「…ちよつと待って下さい、弦十郎さんに連絡をさせて下さい。」

そう言つて、僕は二課に通信を繋げた。

~~~~~

「どうだった？」

「行っても大丈夫だそうです、少しの間ですがよろしくお願いします。」

「よし！じゃあ、僕より一足先に目的地に行ってもらおうか！」  
そう言つて、戦兔さんは自分の前に扉のようなものを作り、そこに  
僕は飛び込んだ。

t o b e c o n t i n u e …